

武蔵野日曜聖書講筈

祈り

――マタイ伝第6章6～13節――

1993年1月17日

小池辰雄

戸を閉じて 神讚美 密かに祈れ どこまでも祈りぬけ 魂の呼吸 天と我とのもの凄い境地
 魂の叫び 地球を上から眺めて 棄身の愛 愛はリアクション 十字架の愛 唯一神ではなく
 拝一神 心を持ってきてくれ 対象化できない世界 十字架で贖われているから 全身で呑み
 込む 私は楽でしようがない 十字架・聖霊の証者

【マタイ6】

6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。7 また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思ふなり。8 さらば彼らに倣うな、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要な物を知りたもう。9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。10 御国の来らんことを。御意の天のごとく、地にも行われん事を。11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。13 我らを嘗試に遇せず、悪より救い出したまえ」

●戸を閉じて

今日は「祈り」という題でお話します。

6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。……

イザヤ書の26章20節に、

「20 わが民よゆけ、なんじの家にいり汝のうしろの戸をとじて忿怒のすぎゆくまで暫時かくるべし。」(イザヤ26・20)

とある。祈りのこととちよつと違うけれども。

イエスという方はどういう方であるかという点、私は第一に祈りのひとであると言いたい。



●神讚美

祈りと言うと、詩篇が「祈りの書」と普通言われるけれども、大体、「詩篇」という訳は本当はおかしい。ヘブライ語では「テヒリム」といって、これはもともと「ハレルヤ」の「ハール（讚美する）」という字からきている。

「ハレルー・ヤー」
とは

「汝ら主を讚美せよ」

という意味です。だから、「テヒリム」というのは、本当は「讚美歌」ということ。もともとは「讚美歌集」なんです。本来は、

「神を讚美する歌」

という意味です。だから、祈りというのは本来、神讚美ということなんです。祈っているうちに讚美が変わっていく。詩篇をみていると、初めは非常に苦しんでいても、終りの方では讚美や感謝になっている。たとえば、詩篇の22篇を見ても、

「わが神わが神なんぞ我をすてたもうや。」

と、初めは非常に、神さまに捨てられたと言って嘆いているが、終りの方では、

26 謙遜者はくらいて飽くことをえ、エホバをたずねもとむるものはエホバをほめたたえん。願くはなんじらの心とこしえに生きんことを。地のはては皆お

もい出してエホバに帰り、もろもろの国の族はみな前にふしおがむべし。

…… 30 たみの裔のうちエホバにつかうる者あらん。主のことは代々にか

たりつたえらるべし。31 かれら来りて此はエホバの行為なりとてその義を後

にうまるる民にのべつたえん。」（詩篇22・1…31）

と、ちゃんとそういうように書いてある。

●密かに祈れ

6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父

に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。

「隠れたる」と書いてある。祈るのは密かに祈れという。独りで、

「神―キリスト―我」

の直線の関係です。一対一の関係。みんなでこうやって祈るのは、その一対一が本ものになつてないと、みなで祈ることが本当の祈りにならない。寝るとき、床の上に平伏します。また、起きる時も端坐して祈り、それから起き上がる。とにかく、寝る時、起きる時は必ず神さまとの関係をもつ。キリストの懐の中に入って眠る。

よく、電話で「祈ります」なんて言ってみたり、また手紙に書いたりする。さっぱり祈らないのに、「祈ります」なんて書いたりする。慣用語みたになつている。神さまなき民



主義だからね。私は、「祈ります」と書く時には、必ずその瞬間に筆を置いて祈ります。それでなければ偽りになるから。

人をゴマかし、自分をゴマかしても、神さまをゴマかすわけにはいかん。人間は間違ったり、躓いたり、転んだりするさ。その時には平伏さなければ、

「すみません」

と。だから、「平伏し」というのは非常に大事なことです。誰だつて躓いたり転んだりするよ。そのことを

「誰それはこうした、ああした」

なんて、過去のことをいろいろ言う人がいる。そんなことを言うのはクリスチャンではない。みんなお互いさま、滑ったり転んだりしている。人のことなんか言えるかというんだ。

祈りというのは、ここに「ひそかに」とあるのは、

「神・キリスト・我という関係は他のもので煩わされるな」

ということですよ。これが「戸を閉じて」という密かにの意味です。部屋の中であろうと、野原であろうと、山の中であろうと、どこであつてもいい。大空が天井だ、大地は床だと。

●どこまでも祈りぬけ

キリストの言葉でも——その時その時に、キリストはのつぴきなならない角度からおっしゃるから——矛盾しますよ、聖書の言葉はあちらこちらで。矛盾しているのが本当なんです。

「その場においてはかく言うのが一番当然な言葉である」

ということで言っている。

「次の別な場合にはこういう言葉が当然である」

ということですよ。たとえば、祈りの言葉でもそうです。ルカ伝18章に、

「『また彼らに落胆せずして常に祈るべきことを、^{たとえ}譬にて語り言い給う、²『或る町に神を畏れず、人を顧みぬ裁判人あり。³その町に寡婦ありて、しばしばその許にゆき「我がために^{あだ}仇を審きたまえ」と言う。⁴かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、⁵此の寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然らば絶えず来りて我を悩ますん』と』⁶主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、⁷まして神は夜昼よばわる選民のために、^{たと}縦い遅くとも遂に審き給わざらんや。⁸我なんじらに告ぐ、速かに審き給わん。然れど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』」（ルカ18・1～8）

とある。

「祈るなら、烈しく迫れ」

という。



「もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼はその手のわざをしめす。この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。語らずいわずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ。

名文だね、これは。声は聞こえないけれども神さまのひびきは全地にあまねし、という。

7 エホバの法はまたたくして靈魂をいきかえらしめ、エホバの証詞はかたくして愚なるものを智からしむ。…… 14 エホバわが磐わが贖主よ、わがくち

の言わがこころの思念なんじのまえに悦ばるることを得しめたまえ。」(詩篇

19・1:14)

人に悦ばれるのではなく、

「あなたに悦ばれるようなことでなければダメなんです」というわけです。

キリストが洗礼のヨハネから洗礼を受けた時に、水から上がってきたら、

「汝はわが愛しむ子なり、われ汝を悦ぶ」(マタイ3・17)

という、あの響きはこの祈りをちゃんと、もうキリストがいただいているわけだ。

「聖霊、鴿の如く降りて……」(マタイ3・16)

と書いてあるでしょ。ヨルダン川でキリストが受洗した時のことは素晴らしい。

もう、右も左もありはしない、前も後ろもない。天だけだ。

「世もなく、人もなく、我もなし」

という言葉がある。そのように神さまの中に飛び込む。キリストの中に飛び込んでいる。時々、天と我とのそういうもの凄い境地に入った祈りをしないといかん。

●魂の叫び

9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、

「天の父」

とキリストは言われたけれども、私はただ、

「主さま」

だ。「主さま」だけ、この一言だけ。南無妙法蓮華経でも、南無阿弥陀仏でもない。一番簡単なんだ。「主さまー」と、全身で沈黙の叫びをあげる。沈黙の叫びで

「主さまー」

と全身でキリストの前に自分を投げ出すと、もうその瞬間に力が来てしまう。御霊の力が来る。クリスチャンは理屈が多すぎる。理屈はひとつも要らない。叫びなんだ、魂の叫びだ。そこには理屈なんかでは来るはずがないところのもの凄い力が来る、光が来る、生命が来る。ゴタゴタ考えているうちはダメです。



「我思う故に我あり」
ではない。

「我祈り入る、それ故に我あり」
だ。祈り入らなければダメなんだ、キリストの中に入らなければ。祈るだけではダメだ、祈りしなければ。キリストと一つとならなければ。

「エン・クリスト（キリストの中に）」
なんだ。

キリストの言葉は烈しい。烈しいから、その中に入ると、もの凄い力がある。キリストは、「神さまは、祈る前から知ってらっしゃるから、クダクダと祈るな」と言うかと思うと、

「どこまでも烈しく祈りぬけ」

と、まるで矛盾したようなことを言っている。その時その所においては、かく言わざるを得ない言葉をもっておっしゃる。これは矛盾でも何でも無い。そういう劇的構造が読めないうちは、聖書は読めない。

●地球を上から眺めて

ローマ書8章のところに、

「²¹然れどなお造られたる者にも滅亡^{ほろび}の僕たる状^{さま}より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存^{のこ}れり。²²我らは知る、すべて造られたるもの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。」

非常に悩みや苦しみの多い世の中だ、と。

「²³然のみならず、御霊^{はしめ}の初の実をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体^{からだ}の贖^{あがな}われんことを待つなり。」

魂ばかりでなくて全存在が本当に贖われんことを、と。地上ではダメなんです、天界に行かないと。

「²⁴我らは望^{のぞみ}によりて救われたり。」（ロマ8・21～24）
とは、そういうことです。

「望みを現在にただいて、そして救われている」

ということ。望によりて救われたり」を、また別な言葉で私に言わせると、

「根源現実においては救われている」

ということです。相対的現実ではない。根源の現実です。

詩を書く時の私の境地は次元が違う。相対的次元ではない。もうひとつ上の次元にいる。でなければ、詩は書けない。その現実に入って、そこから書く。この損なわれたる地球を上から眺めている。そういう霊的現実に入って初めて詩が書ける。この相対的現実では書け



ない。普通の詩人はそこに入っていないよ。一流の詩人、ダンテやゲーテや、イギリスのブラウニング、アメリカのロングフェローなんかはそういう次元に入っている。ありがたいね、聖霊の光でもって聖書を読んでいると、もう、力が来て、光が来てしようがない。まぶしくなる。ミルトンあたりはとうとう失明してしまっただけでも、もう心眼が開けているから、彼は聴くだけでちゃんと中身を知ってしまう。

● 棄身の愛

マタイ伝の22章に、

「³⁴パリサイ人ら、イエスのサドカイ人らを黙さしめ給いしことを聞きて相集まり、³⁵その中なる一人の教師、イエスを試むる為^に問う、³⁶『師よ、律法のうち孰^{いずれ}の誡命が大なる』³⁷イエス言い給う『なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思^{おも}を尽くして主なる汝の神を愛すべし』³⁸これは大にして第一の誡命なり。³⁹第二もまた之にひとし「おのれの如く、なんじの隣^{となり}を愛すべし」⁴⁰律法全体と預言者とは此の二つの誡命に依^よるなり』(マタイ22・34～38)

「全身全霊をもつて神を愛せよ。第二は、自分のように隣人を愛すべし」と。これは、

「人間は、自己愛というものは本能的だが、そのように隣りを愛すべし」ということ。しかし、本当に隣を愛するときには、「己の如く」のこの己はなくなってしまう。

「私は自分もかわいけれども、隣りも愛そう」

なんて、そんなものは本当の愛ではない。棄身^{すてみ}の愛にならなければ。こういう言葉の奥が読めないダメです。

「己の如くとあるから、自分も愛してもいいんだな。それとまた同じように隣りも愛する」

なんて、そんなことではない。棄身で愛することです。己を愛するのは、自己愛というのはみんな本能的に強いが、その第二の本能的に隣りを愛する。その時にはもう、自分なんかは問題ではない。それは棄身の愛という。

「己の生命^{いのち}を友のために棄てる。これより大なる愛はなし」(ヨハネ15・13)

と、キリストは別なところで言っている。そのことです。けれども、我々は、手放してこんな愛はできやしません。

● 愛はリアクション

「なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思^{おも}を尽くして主なる汝の神を愛すべし」

と、旧約ではそう言うでしょう。一生懸命で旧約ではやるさ、けれども、これが本当に可能であるためには、聖霊が来てなければできない。御霊の愛で愛されていなければダメな



んです。神・キリストから来る霊は聖霊ですから。神・キリストから来ているこの聖霊の愛を受けると、今度は、それが反射的に上にいく。これで神を愛することができる。反射です。リアクションなんだ、この愛は。手放して愛せるかというんだ。御霊が来ていると、神を愛せざるを得ない。「愛すべし」ではない。

「愛せざるを得ません、それでなければ、御霊は消えてしまいます。神・キリストを愛せざるを得ません、神・キリスト・我の関係は一番深い関係です」

とはつきり言えるんだ、この聖霊の世界に入ると。それは十字架で贖われているから。この十字架を受けとらなければ、聖霊は来ない。これが「十字架・聖霊」ということです。だから、

「十字架と聖霊とは絶対不可分の関係である」

と言っているのはそのことです。キリストは地上では聖霊を降さなかった。

「私が受くべきバプテスマ、十字架を受けとったら、お前たち、祈って待つていろ、聖霊が来るから」

と。これがペンテコステでしょう。

●十字架の愛

また、

「人を愛さない者は神を愛さない」

と、逆なことを言っているところもある。ヨハネ第一書の4章7節に、

「7愛する者よ、われら互いに相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。8愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。9神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10愛というは、我ら神を愛せしにあらざ、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給いし是なり。……」

この十字架の愛が、これが愛なんだ。そういうような愛でもって互いに愛せよ、棄身で愛せよ、と。

13神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。(ヨハネ一4:7、13)

これは大事なところです。

聖書は自分の生命の一部分です。向こう側には、次の世界には聖書を持って行くわけにいかないから、自分自身が生きた聖書になつていなくては。

十字架を本当に受けとつていれば、お互いに、躓いたり転んだりしても、みんなお互いにゆるすことができる。十字架を受けとつていくせに、人をゆるせない者は十字架を本



当に受けとっていない。そんなクリスチャンはクリスチャンではない。

●唯一神ではなく拝一神

施しを成すときに、

「右の手のすることを左の手に知らせるな」(マタイ6:3)

とは素晴らしい言葉です。ということはどういうことかというのと、右でやるときには、左の手は無い。左の手でやるときには、右の手は無い。それだけの意識を持たなければダメなんです。

ヤヴエーの神とイスラエルの関係は、

「**私の他にいかなるものも神とすべからず**」(出エジプト20:3)

と書いてある。あれは「すべからず」ではない。

「お前、イスラエルにとっては、私の他には神はあれども無きがごとし」ということなんです。

「他の神々はあるよ、けれども、私の顔の前には私だけがお前の神だ」

という、対一の関係だということです。人格関係というのは比較を許さない、そういう関係です。

人間の関係で、一番簡単なのはA、Bだけれども、普通の社会的な関係はA、B、Cなんです。AのBに対する関係、AのCに対する関係、BのCに対する関係はそれぞれの絶対性を持っている。比較してはいけません。人格関係というのは比較してはいけません。AとBとの関係はそれ一つ。BとCの関係はそれ一つ。AとCの関係もそれぞれ。AはCとの関係、Bとの関係をどうやるかと、そういう比較的な関係をしていたらダメです。それは人格関係ではない。人格関係というのはどれも対一なんです。どれも全部対一。比較研究を許さない関係です。

「お前、イスラエルにとっては私だけがお前の神だ。他のいろいろな神々はあるけ

れども、それは関係ない」

という、拝一神教なんです、唯一神教ではない。唯一神ではない。神さまはたくさんいる。拝一神です。

●心を持ってきてくれ

道を求めることの有名な話がある。達磨^{だるま}大師が面壁していたら、ある青年がやってきた。神光^{しんこう}という。そして道を求めた。達磨は面壁していて、さっぱり向いてくれない。神光は、夜が更けて明け方になるまで外で立ちすくんでいた。雪が降ってきて、膝も没するほど雪が積もった。彼は雪の中で立ちすくんで、いつ達磨が答えてくれるかと待っていた。達磨はさっぱり答ええない。



「実は、道を求めているのです」

「まだ、ダメだ」

そしたら、神光が自分の左腕を切ってしまった。そして左腕を差し出して言った、

「私は棄身で道を求めております」

それをみて、達磨もさすがに感心して、

「そうか、お前はそれだけの気持で道を求めているか。それでは、私に心を持ってきてくれ」

と。「心を持ってきてくれ」といったつて、心臓をえぐりだすわけにもいかない。

「心はどうして得るか自分もわかりません」

すると、達磨は、

「それで安心したよ、お前が心を持ってこれなくて」

心は見えないけれども——心でも魂でもいいですが——心の世界は中心ですから。

「心は得て得べからず」

と、それで達磨は安心したという。

「それではこれからお前を弟子にしてやる」

と。この話は、雪舟の「慧可断肘^{えかだんび}」という絵がある。

●対象化できない世界

人間の心とか魂とかいう一番中心の世界、これは対象化することのできない世界です。「ここに花がある」というのは、これを対象化して見ているわけだ。けれども、本当に花を見ている人は、花と一つになっている、

「花が自分か、自分が花か」

という境地です。何でも一つになっている世界が本当の世界です。

キリストでも、神さまでも、ただこれを対象化して考えているうちはダメなんだ。天国はどこにあるかと、あちらこちらと考えたところが、

「そうじゃない、お前たちの中にあるぞ」

とキリストが言った。

「天国は汝らの中にあり」

「恵福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と言う。霊が貧しくて何も無い、そこに天国が入ってくる。

「その人自身が天国だ」

ということ。天国の本体はキリストだから、キリストが入ってくる。要するに、一如の世界です。キリストと一つになっている。神・キリストと一つになる。



●十字架で贖われているから

では、どうやってキリストと一つになれるかというところ、十字架で贖われているから一つになれる。十字架に贖われないうちは、どんなに一つになろうとしたって、なれない。地上でキリストが伝道していたうちは、弟子どもがいくらキリストと一つになろうとしたって、これはなれないんだ。

「私が受くべきバプテスマ、十字架を経たら、それから、祈って待っている。聖霊がくる。そうしたら一つになれるぞ」

と、こういうわけだから。もう、はつきりしているんだ、十字架・聖霊は。

「十字架・聖霊は絶対に切り離すことができません。十字架は土台です」と私が言っているのは、そういうことなんです。

「十字架、十字架」と言っても、十字架が観念だと、聖霊にやってこない。他方、今度は「聖霊、聖霊」とやっている、ヘタすると、霊的傲慢になってサタンになる。十字架が土台にないと危ない。

「私は霊的になった」

なんて、冗談じゃない。御霊の世界は、神さまのものを私することのできない世界です。

●全身で呑み込む

皆さん、よく全身で呑み込みましたね。そうしたら、本当の平安がくる。本当の平安は力がありますよ。キリストの証者、証し人であること。証し人でなかつたらクリスチャンではありません。証者であるためには、必ず聖霊が宿っていなければ証者になれない。

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」(ロマ8:9)

とパウロがはつきり、ロマ書8章で言っている。パウロは本当に素晴らしい弟子です。キリストに一番逆らっていたやつが一番素晴らしい弟子になってしまった、ダマスコ途上でひっくり返されて。そして、パウロは十字架と聖霊がピタリ一つ、両方とも烈しく語っている。

集会は大事です。文字よりか、直接の響きでもって受けとるのが一番いい。響きの世界だから。私が響きを持たなければ、こんなことは言いません。御霊の響きをいただいているから、はつきり言える。主観的にものを言っているのではないんだから。

「せざるを得ず」

という世界が一番本当の世界です。

「いっしょしようか、ああしようか」

ではダメなんだ。「かくせざるを得ず」という世界です。

「他の具合にはできません」

ということ。



「せざるを得ずという世界が一番本当だ」
 ということはヒルティも『眠られぬ夜のために』の中で言っている。
 「祈らないではいられません」
 であって、「祈るべし」ではない。「祈らないではいられない」ということ。

●私は楽でしようがない

祈り入る。キリストは神さまのふところの中で祈っていた。我々はキリストのふところの中で祈る。「主さまー」と叫ぶと、キリストの懐の中に入ってしまう。そしてそこで祈ったらいい。いつまでも、主さまと別にいて対立しているうちはダメです。魂の世界で、「主さま！」と内側で叫んだら、キリストの中に入ってしまったら。十字架で贖われているのだから楽に入れる、無条件で。

「お前はこういう悪いことをしたから、ちよつと待て」

とはキリストは決して言わない。片一方の盗賊も、

「どうもすみませんでした。せめても覚えてください」

と言ったら、キリストは、

「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」(ルカ23・42～43)

と仰ったではないですか。そういう世界だから、福音の世界は。人間的な条件なんか、一つも言わない。全身でもってぶつかっていけば、キリストは無条件で受けとってください。だから、私は楽でしようがなく、力がきてしようがない。本当なもの。

●十字架・聖霊の証者

我々は、そういう意味で、十字架・聖霊の証者でありたい。証者でなかったら、すべて空しい。私の詩の自身は、ちよつと普通の人は考えられないね。上の次元から眺めて書いている。詩の次元は違うんです。そんなことを言っても、あなた方はヘンだとも知らない。変なんだ、正直、普通じゃない。私は例外者だから。仕方がない、神さまがそういうように造った。神さまの責任だから。自分で成ったのではない。無責任の世界というのは非常にいいものだ。神・キリスト・聖霊が責任をとってくださいから、こんな有難いことはない。そのかわり、責任をとる神・キリスト・聖霊には全托しなければダメなんです。人間的な考えではダメです。皆さんも、それぞれのことをなさるときに、左顧右眊なく、キリスト直結の世界でなされば、エライことになる。人の思惑おもわくなんか考えているうちはダメですよ。いいですか。どう思われたっていいんだ、そんなことは。それは、

「神―キリスト―聖霊―我―」

の線が火花を発しているところには、何ももの妨げることはできない。向かってくるやつは逆にひっくり返える。そういうもんだ。

